法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

まちづくりと市民のキャリアデザイン(1)：NPO法人野田文化広場メンバーの場合

KANAYAMA, Yoshiaki / 金山, 喜昭

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
237
(終了ページ / End Page)
256
(発行年 / Year)
2006-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003229

Hosei University Repository

まちづくりと市民のキャリアデザイン(1)
～NPO法人野田文化広場メンバーの場合～

法政大学キャリアデザイン学部助教授　金　山　喜　昭

はじめに
1．野田の「まちづくり」活動史
2．NPO法人野田文化広場の設立理由
3．NPO法人野田文化広場の発足と活動
4．メンバーの意識調査
5．結語

はじめに

「まちづくり」という言葉は、官庁が都市計画、都市開発、総合計画など「役所言葉」を住民に分かりやすく伝えるために、先進的な自治体で使い出したとされる(1)。しかし、現在、「まちづくり」とは、単に都市のインフラ整備ではなく、「まち」に暮らす人たちが活力をもち、生活を向上させていくために、市民が「まち」を継続的に変化・発展させていくことをさす。それは市民主体の立場であり、大事な点は、なによりも継続的な行為である。「まち」は、人びとが意識を共有しながら共存的に生活をするある空間的な一定の領域といえる。

「まち」は、自治体を単位にする場合、さらに自治体内でも「昭和の大合併」以前の旧町村単位や、さらに大字や小字単位のように町内会などの地区単位をさすこともある。あるいは欧米などの都市のように一つの都市に民族（エスニック）単位ごとにコミュニティを形成している場合もある。ここでは、千葉県野田市内の旧野田町(2)を「まち」と想定する。

Hosei University Repository

私はメンバーの一員として、千葉県野田市の旧野田町地区の活性化を図るために、市民団体の「野田文化広場」を2005年１月に設立して活動を始めた。同年５月にNPO法人となる。本稿の問題提起は、本会に参加するメンバーは、その活動を通してどのように個人の行き方を変化・発展させているのか、すなわち自らのキャリアデザインにどのような影響を及ぼしているのかということである。それを理解するために、NPO法人を運営する当事者（実行者）の立場から、その運営や活動を通じて、メンバーに対するアンケート調査などを用いて考察する。

１．野田の「まちづくり」活動史

まず、現代の「まちづくり」活動に入る前に、旧野田町の「まちづくり」活動史（昭和20年代～30年代前半）にふれておきたい。

野田町は近世・近代に醤油産業の都市として繁栄した。1917年（大正６）に江戸時代に創業した醸造家８家が合併して野田醤油株式会社（以後、野田醤油と略す）を設立して、国内最大の醤油企業となった。大正末期から昭和初年には、企業による都市整備が行われた。野田商誘銀行、野田人車鉄道、軽便鉄道、野田病院、学校、水道設備などが野田醤油や経営者たちによって設立されるなど、野田醤油が都市整備の主導的な役割を果たした。当時の町民は16,000～7,000人、職業人口は約6,000人のうち、約６割が醤油産業の傘下に従事する者や、運送業者や製樽業者であった。また、各種施設の建設にともない人材を外部から招聘した。医師、技術者、教育者などのエリートが野田に移り住むようにもなった。

終戦直後の野田町には、30余りの文化団体が、文学（小説・詩・俳句・短歌・書など）、邦楽、囲碁、美術などの趣味や教養をはかる活動をしていた。戦中からこうした団体が発足した背景には、「まち」が戦災にあわずに、醤油産業がもたらす経済力によるところが大きかった。文化団体を支える存在として、野田醤油の創業者一族が、社会事業を目的にして設立した財団法人興風会の興風図書館があった。1943年（昭和18）に函館市立図書館から招聘されて来野した佐藤真は主任として、図書館を地方文化の拠点として位置づけて、読書以外にも、講演会、文化団体の育成、各種文化団体との連携などを図り、文化

Hosei University Repository

的な市民の育成をはかった。

1947年（昭和22）5月の町会議員選挙で、文化活動を町政に活かす立場から、賛同する文化団体の市民たちの運動により、メンバーの深津釣葭（野田醤油労働組合員）、池松武之亮（医師）が町会議員となり、同年11月に各文化団体の代表者を集めて「戦後の落ち着かない社会に文化運動を通じて、お互いに知り合い、灯を点じるために放談の会をもちましょう」と呼びかけて、実質的なスタートを切った。さらに翌年2月に2人が発起人となり興風図書館の佐藤とも調整して、起草文には「談林風発、夜の明けるのを知らず」というように勢いをもって文化人の結束を呼びかけて、3月に野田地方文化団体協議会（以後、文協と略す）を発足した。会長は池田遷（興風会主事）、副会長は佐藤真（興風図書館主任）、加盟団体は、野田文学会、野田読書会、野田俳句作家連盟、下総歌話会、旧式機関車などの文学、丁亥（ていがい）会、彩々会などの美術、野田邦楽会、鳴子と案山子などの音楽関連など20以上もの団体が加盟した。文協は、文化団体の連合会として、単なる親睦会を脱却して、市民主導による文化による「まちづくり」を目指した。日本の再建のために、「まちづくり」を基盤にして「くにづくり」を射程におくものであった。企画は、佐藤、池松と野田読書会長の市山盛雄らと、事務局は旧式機関車を主宰する小谷津順郎であった。

文協の事務局は、興風会の了承のもとにより興風図書館におかれた。佐藤は、図書館活動の一方で、市民の文化活動の拠点として、図書館を開放した。事務室は、さながらサロンの場となり、いつでも文協メンバーの誰かが来て情報交換をし、会合はしばしば深夜までおよび、職員もそれに付き合ったという(3)。自営業者は昼間でも時間の融通がつくだろうが、サラリーマンは夜でなければ会合には参加できない。休日だけでは日数が足りないので、平日の夜はメンバーたちにとっては大事なひと時であった。公立施設では職員の残業規定や、夜間10時以降は施設利用が制限され、管理者の都合により、市民活動が制限されがちである。しかし、興風図書館の佐藤らは市民活動を保障していた。これも財団当事者の理解と職員の理解によるものであり、「まち」の一員として、職員も市民も同じ意識を共有していたようである。

まず文協発足直後の3月、國學院大學による古墳や貝塚の発掘調査が行われた。それには地元の野田高等学校の生徒や市民も参加した。発掘期間中には図

Hosei University Repository

書館で文協メンバーたちの座談会などが行われた。それは市民が古代文化に関心をもつ契機になり、文化団体に連合体としての団結力をもつことになったという(4)。古代遺跡の調査はその後も行われ、同大学の樋口清之は講演や古代住居の復元などの考証を通じて文協メンバーと交流をはかった。中根八幡前遺跡の調査で当時同大学生の下津谷達男は、その調査を経験して、後述する野田市郷土博物館に勤務後、國學院栃木短期大学教授になっていく。また、当時中学生であった石毛直道は、京都大学に進学して考古学や文化人類学を学び、国立民族学博物館館長として世界的な食文化の民族学者になった。この発掘が個人のキャリアデザインの節目になったようである。

そのほかにも文協は多彩な活動を行った。中根八幡前遺跡の調査後に、下総歌話会が提唱して「葛飾早稲」の万葉歌碑の建設期成同盟を発足して建設した。また、講演会、座談会、音楽会なども企画・実施した。文協の結成を祝う記念講演は当時、元第一高等学校長の天野貞祐「文化と教養」をはじめ、その後も哲学者の谷川徹三、民俗学者の柳田國男、文芸評論家の亀井勝一郎などが来野している。展覧会は、樋口の監修により「東葛飾地方古代文化展」、「住居の歴史展」「食生活展」や、1951年（昭和26）には文協の組織内に「美術鑑賞会」が発足して会員の愛蔵品の日本画・洋画・刀剣などの展覧会も行われた。あるいは子どもたちによる作文や図画のコンクールも企画して12年間にわたり毎年行われた。これらの大多数は興風会館で行われた。なお、こうした活動は、興風会や野田醤油の財政や人的な支援に負うところが大きかった。

文協の活動の中で最も注目されるものは、郷土博物館の建設運動である。郷土博物館は1959年（昭和34）に野田市が設立したが、文協による郷土博物館建設運動の延長線上に位置づく。運動の開始は1950年（昭和25）９月であった。当時、古代遺跡の発掘品は図書館で展示公開、収蔵されたが、先述した樋口の謦咳に接した執行部の会員から博物館をつくろうという機運が盛り上がり、同年の野田市制施行にあわせて、文協から市長・市議会議長に対して「郷土博物館建設の陳情書」が提出された。それには樋口による建設の目的、展示内容、事業、運営法、建設法、費用概算などが詳細に書かれた「博物館構想書」が添付された。その後も、文協は、樋口の指導をうけて、醗酵科学、人文科学、自然科学、産業・厚生、博物館建設の専門部会を設けて毎週１回の会合を開いて

Hosei University Repository

検討を繰り返した。また、資料収集や啓発のために展覧会なども実施したが、そうした活動は樋口に逐一報告されアドバイスを受けるなどして、博物館建設の実現に向けて準備が進められた。さらに建設資金の大部分を野田醤油が出資したことが弾みとなり、郷土博物館は野田市が設立して、市の直営となった。

文協の中核的なメンバーたちは、医師、野田醤油の社員や労働組合員、興風会職員、商店主、画家、教員、タウン誌発行人、会社員、住職、役場職員など多彩であったが、全ての人たちに共通するのは「文化」を生活の一部にしていたことである。中でも俳句や短歌などの文学を嗜む人たちが多かった。職業などの障壁を越えて、市民が「まちづくり」の共通認識をもち得た理由として、個人のもつ文化により価値観を共有して「まちづくり」をしたといえよう。また、その牽引役になった人たちの多くは野田町以外の出身者であった。「まち」の過去の人的なしがらみに囚われることなく、自由な活動を押し進めることができたのだろう。

しかし、文協の発足後3年が経過して、会の自由な雰囲気が損なわれて固定化する傾向に危機感を抱いたメンバーの市山盛雄は昭和26年4月26日に、「二六クラブ」を発足させた。設立日から名称を「二六クラブ」と名づけた。これはメンバーたちのサロンのような会で、無目的な自由放談の場であった。この会はメンバーの親睦を図るとともに、文化や「まちづくり」について、それまで図書館の佐藤の部屋がサロンの場となっていたが、さらに拡大した意見交換の場として参加者を一般公募している。二六クラブの会長になった小田倉一によれば、「文化団体（文協を指す）に関係して以来、つくづく思うのは文化というものが得体の知れない、定義も何も出来ないものだが、関係する人達のもつ雰囲気の集合によって支えられている。それは危うく支えられている。一朝間違えばそれは固定し、非文化となるようなものである。それであるから文化的な良識と、俗悪な良識とが常に撰分されなければならない。文化団体の持つべき感覚もそんなところにピントを合わせて行くべきであろうと思っている」(5)というように、メンバーたちはコミュニケーションの固定化や形骸化を危惧して軌道の修正をはかっている。

こうして市民たちは自らの活動に、やりがいや生きがいを感じながら、実行する過程を楽しみながら、キャリアデザインしたといえる。しかし、1955年以

Hosei University Repository

降（昭和30年）から、文協の活動は行政に引き継がれていくことになる。行政は、博物館のほかに公民館や文化会館などの文化施設を設置するなど「文化行政の時代」を迎えることになる。興風図書館も1979年（昭和54）に財団法人興風会から市に移管された。しかし、行政が文化事業を引き継ぐようになると、市民の主体性は次第に失せていき、行政主導の文化活動に転換して、次第に文化施設が「箱物」化するようになっていった。

2．NPO法人野田文化広場の設立理由

NPO法人野田文化広場を設立した理由は次の通りである。

（1）「まち」の問題の所在

文協による、まちづくりから学ぶ点は多いが、中でも留意すべきことは、ミッションを明確にしていることである。それは、終戦直後の不安定になった「まち」改善するために市民がコミュニケーションをはかり安定化を図ることであった。

現在の「まち」が抱える大きな問題の一つは中心市街地が沈滞化していることである。本来商店街は、賑わいがあり、そこを訪れれば、何かとの出会いがある。わくわくする空間、癒しの空間、好奇心にみちた空間、チャレンジのできる場であり、情報発信の場になることであろう。また、人や情報が集まり、住んで楽しく、誇りが持てて、愛着のある、まちが自分の家のような感覚をもてればよいと思う。しかし、現在の中心市街地は「ゴーストタウン」化して衰弱している。商店街と周辺地を活性化させるということは、商店街の利益を確保するためではなく、そこは野田市の「まち」の基点であり、市民のキャリアデザインにとってもプラスになる場所であることから、その有効な活用をはかることである。

野田商工会議所では、商店街の活性化についての計画書を作成したが、沈滞化の原因について地元から次のような意見の聞き取りをしている。それによれば、まちが老化現象を起こしている。後継者がサラリーマン化している。後継者問題以前に経営者が誇りを失っている経営者・商店街まち全体が老齢化している。さまざまなイベントをやって人を集めて終わると何も残らない。商店会

Hosei University Repository

同士の連携が悪いのではないか。中高年の商店主が多く若者は商店を引き継ぐ意欲を失ってサラリーマン化している。夢をもって商売をしている人が少ない、というものである[(6)]。ここから理解できることは、「まち」の人たちが「生きる」活力を沈滞化させているということである。原因としては、次のことが想定できる。

原因1：商店街のインフラの未整備である。駐車場不在、バリアーフリーでない、店構えが古い、商店街の老朽化など。

原因2：商店街の活力がないことである。アイディアの欠如、殿様商売の気質から脱皮できない、業種ごとに競争力のある商店が少ない、ホスピタリティーの欠如、新規性や魅力ある商店の欠如。商店街の意思統一の欠如、リーダーの不在などである。

原因3：文化活動の衰退化である。文協の活動の先細り、博物館の機能不全、歴史的建造物の保存活用が進まないことなどである。

原因4：生活・社会環境の変化である。交通手段が車社会になり流れが変化した、郊外に大型店が進出して顧客が流動化した、人口構成の変化・少子高齢化、産業構造の変化、消費動向の変化、景気動向の変化などである。

いずれも、その原因としてあげられるが、私の立場からアプローチできることは、〈原因3〉である。先述した文協は、現在では親睦団体となり、かつてのような「まちづくり」をしていない。創設期に活躍した人たちは世代交代をして、当初のビジョンは継承されずに、また見直されることもなく今日に至っている。博物館は、中心市街地に立地しながらも、財政難による職員定数の削減や職員の資質の低下などにより機能不全の状況に陥っている。また、歴史的建造物は、一部は国の登録文化財に指定され活用が図られているが、面的な広がりをもち歴史的景観を活かすような取り組みに至っていない。

（2）課題の解決に向けて

ここでは、「まち」の人たちが「生きる」活力を沈滞化させているという問題を解決するために、〈原因3〉からアプローチする。なお、この問題は、このまま放置しておくと、おそらく中心市街地の商店街は、今進行しているマンション建設の増加により、住宅地化して、かつての野田のまちなみや、「まち」

Hosei University Repository

に息づいてきた生活・文化も失われることが危惧される。

そこで、このアプローチを開始するにあたり、過去の「まちづくり」が途絶えた理由を押さえておく。文協が当初の役割を終えたのは、その事業を行政が引き継ぐようになったことであろう。博物館、図書館、公民館などの公立施設では職員を採用して安定的な活動が開始した。会を実質的に主導していた佐藤が定年退職を迎えて図書館から退くことで、マネジメントをする人材を逸した。また、図書館を野田市に移管したことで、以前のような自由な活動が制限されるようにもなった。その後の文協は、これらの弱点を克服してまで活動を継続する、新しいビジョンを見つけることができなかったといえよう。そこで、課題の解決手法の確認をする。この課題に適用が可能な手法のリストアップをする。

① 歴史的な原点に立ち返り、文協を再発足して、文協方式の「まちづくり」を再開する。そかし、その弱みは、当時の人たちが生存せず、その手法を採用しにくい。組織が大きく、ガバナンスが欠如している。親睦会になっている。自主事業は「文化祭」がメイン事業。組織内にモチベーションがあるとは思えない。特別の強みはなさそうである。

② 新しく市民団体を発足して独自の活動を開始する。NPO法人か会社などの法人にして公的な組織にする。その強みは、フレッシュな感覚をもつ。目的にあった組織づくりができる。自主性が保てる。弱みは、事務所がない。経験不足などである。

③ 官民共同方式により実施する。行政の管理下で市民団体を発足させて、市民サポーターとして博物館などの支援をする。その強みは、資金確保が安定的である。他方、弱みは、行政の管理下におかれて自主性が損なわれる恐れがある。

以上の選択肢の中から、効果・コスト・実務面での可能性、市民の支持などを検討すると、②が最も現実的で実現妥当な選択肢であるということになる。

3．NPO法人野田文化広場の発足と活動

（1）設立の経緯

こうして市民主導により、文化をキーワードにして、市民同士のコミュニ

Hosei University Repository

表1　NPO法人野田文化広場の活動年表

年月日	事項	会員参加人数	開催場所
2004. 4.25	「考える会」第1回検討会	8人	市民会館
5.30	同　第2回検討会	8人、学生9人	同
6.27	同　第3回検討会	8人、学生12人	同
7.25	同　第4回検討会	6人、学生3人	同
8.21	マップ作成のため市内調査	8人	同
9.19	同　第5回検討会	8人、学生5人	同
10.31	同　第6回検討会	8人、学生8人	同
11.21	同　第7回検討会	8人、学生6人	同
12.19	経営作業部会	5人	同
2005. 1.5	企画事業部会	5人	中央公民館
1.10	経営作業部会	7人	南部コミニティセンター
1.16	同　第8回検討会にて、会の名称を「野田文化広場」にする	8人、学生2人	
1.30	野田文化広場設立総会	26人、学生6人	市民会館
2.27	野田文化広場　第1回実行委員会	7人、学生2人	市民会館
3.12	研修会：谷中見学会・法政大学キャリアデザイン学部シンポジウ	7人、学生4人	
3.27	第2回実行委員会	5人、学生4人	市民会館
4.17	第1回寺子屋講座	7人、学生9人	市民会館
同	第3回実行委員会	4人、学生8人	市民会館
4.24	第1回企画経営部会	7人、学生1人	南部コミニティセンター
5.15	第2回寺子屋講座	5人、学生6人	市民会館
同	第4回実行委員会	3人、学生7人	市民会館
6.8	NPO法人に認可される。NPO法人野田文化広場となる。		
	第2回企画経営部会	6人、学生1人	金山自宅
6.19	第3回寺子屋講座	8人、学生8人	市民会館
同	第4回実行委員会	4人、学生8人	市民会館
7.4	第3回企画経営部会	3人、学生1人	金山自宅
7.6	山中直治部会	7人	南部コミニティセンター
7.17	第4回寺子屋講座	5人、学生6人	市民会館
同	第5回実行委員会	4人、学生6人	市民会館
8.21	第5回寺子屋講座	5人、学生5人	市民会館
同	第6回実行委員会	2人、学生5人	市民会館
8.3	山中直治部会	4人	市民会館
9.5	第4回企画経営部会	6人、学生1人	金山自宅
9.18	第6回寺子屋講座	3人、学生4人	市民会館
同	第1回理事会	11人、学生1人	市民会館
同	観月会	10人、学生6人	市民会館
10.5	研修会：谷中芸工展見学	2人、学生1人	
10.16	第7回寺子屋講座	3人、学生6人	市民会館
同	第7回実行委員会	2人、学生3人	市民会館
11.7	第5回企画経営部会	6人、学生1人	金山自宅
11.13	第8回寺子屋講座	7人、学生5人	市民会館
同	第2回理事会	17人、学生1人	市民会館
11.23	研修会：野田市内建物見学会	3人、学生8人	
11.28	第6回企画経営部会	6人、学生2人	金山自宅
12.18	第9回寺子屋講座	7人、学生3人	市民会館
同	第8 回実行委員会	4人、学生5人	市民会館

ケーションを促進する、新しい「まちづくり」活動をはじめることになった（**表1**）。2004年4月に仮称「考える会」を発足した。メンバーは著者のほかに市内在住の人たちである。職業は、商工会議所職員、保育園経営者、市役所職員、主婦、団体職員、税理士、グラフィックデザイナー、個人美術館経営者など10名ほどであった。毎月1回ほどのペースで会合をもち、ミッション、組織形態、マネジメントなどについて話し合われた。ミッションについては、先述

Hosei University Repository

した中心市街地の人たちの活力が沈滞化していることを問題として、個人から各団体間に至るまでお互いの垣根が高くコミュニケーションが進まない現状を改善するために、「文化」をキーワードにし相互の垣根を低くして自己発見や刺激しあう関係づくりを目指すことをミッションとした。それを実現するためには、任意団体の親睦会ではなく公的な組織であるNPO法人の取得をはかることが決められた。

次に、その人事であるが、理事長としては地元の古刹の金乗院の住職の加藤純章氏にお願いすることになった。加藤氏は前名古屋大学教授で麗澤大学教授として仏教哲学を専門とする学者である。会のトップとしては最適の人事となった。トップが決まり、副理事長は地元の商工会議所の副会頭で建設会社社長の山本章裕氏に会の財源確保と商工会との橋渡し役となってもらうことになった。また、理事の人選は各方面の市民に依頼して、会のミッションに適するように配慮した。「考える会」のメンバーからも理事を出し、新たに企業経営者、障害者・高齢者福祉の代表者、文協理事長、元博物館長、自然保護団体会長、興風会館長、高校教師などを人選した。実質的な会の運営は「考える会」のメンバーが踏襲して実行委員会や企画経営部会で実務を行い、理事会で全体のコンセンサスや活動の方向づくりなどを協議・決定することにした。また、こうしたテーマに関心をもつ野田市外在住の学生たちにも参加を呼びかけて、「まちづくり」の体験の場としても活用している。

（2）組織と活動の概要

2005年12月現在、正会員30名のうち、理事長1名、副理事長1名、理事15名、事務局長1名、監事2名、顧問2名で構成される。一般8名、学生会員11名、インターンシップ生1名、団体賛助会員（1口10,000円）28団体より63口、個人賛助会員（1口3,000円）11名32口である。2005年度の予算規模は約120万円。有給スタッフはおらず、全てボランティアにより運営される。事務局は、当面筆者の自宅におく。

主な活動は、寺子屋講座、マップやニュースレターの発行、市民交流会である。まずは高望みをせずに身の回りのやれることからやろうという姿勢である。寺子屋講座は2005年4月から開始している（**表2**）。毎月1回、市民会館を会

Hosei University Repository

表２　寺子屋講座一覧（2005年度）

	まちの仕事人講話	芸道文化講座	親子体験実習
2005 4月	のだっこダイちゃんと歩いた40年 二足のスニーカー人生 漫画家 出野元山さん	郷土人形の魅力 懐い思いを語る 郷土人形コレクター 高梨東道さん	古代のアクセサリーをつくろう 60分で作る「マイ勾玉」 考古学者 金山普昭さん
5月	初代南極観測船"宗谷"の話 陸(おか)の上で船を語り合う 元 船の科学館職員 井上武志さん	俳句を作ろう 今日からあなたも俳人に 俳人 津々楽朋世さん	楽しいスケッチ 身近な物を描いてみよう グラフィックデザイナー 本間尚徳さん
6月	私のキャリアデザイン 法政大学キャリアデザイン学部助教授 金山普昭さん	野田と文学 "のだ町物語り"もまじえて 詩人 中村脩一郎さん	スーパー紙とんぼを飛ばそう 「スーパー紙とんぼの会」代表 鎌形武久さん
7月	樹木と語ろう、自然と人間 ～緑が嗤く、緑が笑う～ 樹医 佐藤要助さん	歌こそ、わが人生の友 ～昭和という時代が生み出した文化遺産～ 歌謡史研究家 須田敏男さん	山中直治の童謡を歌おう！ 山中直治を歌う会代表 秋葉啓子さん
8月	博職人の知恵と技 博職人 玉ノ井芳雄さん	みんなの座禅 ～スローライフのすすめ～ 金乗院住職・駒澤大学教授 加藤顕章さん	連鶴折りに挑戦！ ～一枚の紙から数羽の鶴をつくる～ 折鶴名人 林文夫さん
9月	クラシックバレエに魅せられて 越川光恵バレエスタジオ主宰 越川光恵さん	異国の文化を知ろう ～台湾編～ 法政大学客員研究員 黄 貞燕さん	海と船の話 ～トマトが浮いて、ジャガイモは…なぜ？～ 船の科学館ボランティア 井上武志さん
10月	気軽にワインを楽しむ方法 ワインアドバイザー 待山弘さん	世阿弥の生涯と能楽 ～小説『幽鬼の舞』を上梓して～ 作家 森本冴子さん	楽しい絵手紙 ～誰でも簡単・やさしい描き方～ グラフィックデザイナー 本間尚徳さん
11月	商店街の活性化とまちづくりの抱負 株式会社千代倉代表取締役・まちづくり協議会会長 茂木弘良さん	野田の仲間たち ～敬和亭という明治画家について～ ニューヨーク大学大学院生・東京芸術大学客員研究員 ロジーナ　バックランドさん	ペーパーグライダー教室 野田スカイスポーツ振興会会長 石川雅浩さん
12月	博物館・美術館の展示ディスプレイの世界 丹青研究所業務取締役研所長 里見観幸さん	野田の考古学ことはじめ 野田地方史郷土会会長 下津谷達男さん	勾玉づくり　パート2 考古学者 金山普昭さん
2006 1月	文化財を直す 東京国立博物館保存修復技師 林煥盛さん	日本舞踊と私、そして母 藤間勘美貴会会主 藤間勘美貴さん	関宿の古いお話しを聞こうよ 関宿昔ばなしの語りべ 三輪田良子さん
2月	五感で感じる (有)風月堂　銘の菓子職人 小沢真也さん	日本酒文化について 千葉県立野田北高等学校教諭 白井一道さん	押し花で遊ぼう ～葉っぱで作る動物～ 押花アトリエ　プチ・フルール 小林敏子さん
3月	身体に優しい粧の話 ～イグサで作ろうコースター～ 成田屋店店主 成田清知雄さん	野田の旧い町並み散策 ～野田の原風景をガイドする～ むらさきの里野田ガイドの会会長 染谷慈さん	木で火が起きる！？ 野田市郷土博物館学芸員 宮内友行さん

場にして開催する。市民会館は、江戸時代から醤油醸造家の旧茂木佐平治邸で、国の登録文化財に指定されている。各部屋に分かれて、「まちの仕事人講話」、「芸道文化講座」、「親子体験実習」をそれぞれ同時進行する。「まちの仕事人」は仕事の技や人生を語ってもらい、「芸道文化」は多彩な芸道を紹介してもらい、「親子体験」は子どもを対象にした講座である。講師の一方的な語りで終

Hosei University Repository

わらずに、参加者も自己紹介や感想を述べることでコミュニケーションの活性化をはかっている。「親子体験」では子どもや親以外にも、理事が主宰する障害者団体から知的障害者が参加して、健常者とのコミュニケーションの場となっている。

マップづくりは、「まち」の文化の棚卸し作業となる。正会員は野田市在住でも地域の文化財を知らないことが多く、学生会員は全て市外在住者であることから、作業を通して地域を理解するよい機会になっている。完成版は「野田散策MAPたてもの編」として、2005年8月に千葉県で行われた全国高等学校総合体育祭において野田市でバトミントン競技が行われた際に、来野した全国の高校生たちに配布した。ニュースレターは、会の活動記録とともに広報紙としてこれまでに2号を発行した。市民交流会は、2005年9月の中秋の名月にあわせて、観月会を開催した。それまでの寺子屋講座の講師や参加者に呼びかけて、当会と関わりをもつ人や、その知り合いの人たち約90名が参加してコミュニケーションがはかられている。

4．メンバーの意識調査

2005年5月29日に、正会員と学生会員を対象にして、メンバー間のコミュニケーションの状況や、本会の活動がメンバーの生き方や生活に及ぼす影響などを知るためにアンケート調査を行った。調査は、本会が発足した2005年1月30日から4ヶ月しか経過していないが、「考える会」を開始してから1年1ヶ月になる。メンバーの在任期間や、活動に対するコミットの度合いは異なるが、ここでは設立当初のメンバーの意識を知ることを目的にした。以後の定点観測をする上で、最初の段階になる。調査対象者は、筆者を除く42人であり、そのうち34人から回答を得た。分析は、質的データの単純クロス表による。

設問は大別して7つであり、それぞれを5段階（大いに思う・少し思う・分からない・あまり思わない・全く思わない）で評価する。

1） 本会の活動のミッションを理解しているか。
2） 会員への連絡が円滑に機能しているか。
3） 本会の活動に参加して楽しいと思うか。
4） 本会の活動にやりがいを感じるか。

Hosei University Repository

5）本会の活動に貢献していると思うか。

6）会員間のコミュニケーションが円滑だと思うか。

7）本会の活動に参加して、自己の生活や生き方にプラスになっているか。

アンケートの結果は、まず準備段階の「考える会」から参加したメンバーたちと、野田文化広場を設立する段階で本会に参加するようになったメンバーたちに大別する。ここでは便宜的に前者を「A集団」、後者を「B集団」とする。

A集団のメンバーは、私をはじめとする、旧山中直治研究会のメンバーであった人たちが核となり、それぞれの人間関係で適当な人たちにも加入を促した。グラフィックデザイナー、市役所職員、商工会議所職員、税理士、保育園経営者、高校教員、高校生、大学生、大学院生など27名である。学生たちの大半は私が誘引した。ここでは、先述したように現状の中心市街地の課題や、その解決のために「文化」をキーワードにして「まちづくり」をはかることを確認した。また博物館や歴史的建造物である野田市が管理する市民会館（旧茂木佐平治邸）の有効活用の必要性も話し合われ、将来的には、それら文化施設の指定管理者としての運営も射程にいれることも確認された。その後、NPO法人化についての学習や、マネジメントの準備作業をしながら、マップづくりのために市内調査も実施して、野田文化広場の設立準備を進めた。本会の設立後は、全員が正会員となり、そのうち一部のメンバーは理事になる。学生は学生会員となる。またメンバーは全て実行委員会に所属して、会を実質的に運営する立場の一員となる。27人のメンバーのうち19人からアンケートを回収したが、そのうち半年以上にわたり本会に参加しているメンバーは15人である。

B集団は、先述したように、会の財政基盤を強固にしたり、ネットワークを構築する上で必要とされる市内在住の有識者である。この集団の構成は、A集団の合議で候補者を出して、私が個別に説明して本会への参加を了承していただいた人たちである。会社経営者、元博物館長、元学校長、障害者福祉団体長、文協理事長、主婦、興風会館館長、元山中直治研究会副会長、元中学校音楽教師などや、市民会館の元所有者の茂木佐平治氏が顧問となる。これらの人たちは、理事長、副理事長、理事、監査、顧問というように大多数が理事会の構成メンバーである。16人のうち15人からアンケートを回収した。この集団が、それまでに一堂に集ったのは設立総会（2005年1月30日）と、アンケート調査日

Hosei University Repository

の2005年度総会（5月29日）の2回のみであった。

なお、事務局からメンバー全員への情報伝達は、「考える会」の発足後から行われている。その手段は、メーリングリストや、郵便、電話、口答であるが、メーリングリストでは、情報伝達、意見交換、業務連絡などを日常的に行っている。メーリングリストに未登録のメンバーには郵送で対応している。

（1）ミッションの確認

A集団（15人）とB集団（15人）は、共に本会の設立の趣旨について全員ほぼ理解している。A集団（15人）は「大いに理解している」7人、「少し理解している」8人である。B集団（15人）は「大いに理解している」3人、「少し理解している」12人である。A集団の方が、「大いに理解している」とする人が半数であるが、B集団では大部分の人が「少し理解している」に留まる。それは、A集団では、発会の準備を進めてきたが、当然そこでは会のミッションについて話し合いが行われてきた。しかし、B集団には、こちらがお膳立てした上に乗っていただく形となったことから、ミッションの理解が十分徹底していないことを示している。

本会に参加して「やりがい」や「楽しさ」を感じるかとの設問については、両集団とも「大いにやりがいを感じる」「少し感じる」が半数ずつとなっている。A集団（15人）は「大いにやりがいを感じる」9人、「少し感じる」6人である。B集団（15人）は「大いにやりがいを感じる」6人、「少し感じる」6人、「不明」3人である。A集団は、準備作業を通じて、共につくりあげていく過程を経験したことから理解できる。しかし、B集団でも「やりがい」や「楽しさ」を感じる人が多いのはどういう理由なのだろうか。それは、自由記載から該当する部分を引用すると、「（地域には）文化・生涯学習・ボランティア等種々の活動が盛んです。それらの活動の目的は大いにダブっていますが、これらを線にして、面にして、リーダーを含めて総合力を発揮すべく、何らかの方法（手段）がほしい」というように、会の抱負を語り自らも参加して改革していくことに「やりがい」を感じているようである。または、「障害をもつ子供たちも一緒に参加させていただき、楽しい経験をつんだり、この街で知り合えることは大きな意味をもつと思う」というように、寺子屋講座での参加経

Hosei University Repository

験から「楽しさ」を感じていることが分かる。

（2）メンバーの生活や生き方への影響

次に、本会の活動はメンバーの生活や生き方に影響を及ぼしているのだろうか。そうだとしたら、具体的にどのようなことなのだろうか。キャリア形成にプラスとなっているかについて、A集団は「大いに思う」7人、「少し思う」5人、「不明」3人であるが、B集団では「大いに思う」3人、「少し思う」8人、「不明」3人、「あまり思わない」1人である。A集団の方が、キャリア形成にプラスに働いていることが分かる。

とはいっても、経験が半年以下のメンバーを加えたA集団と、B集団を合わせた全員34人について、キャリア形成と「やりがい」を共に感じる人は34人中24人となっている。それは、キャリア形成と「楽しさ」の関係でも同じことがいえる。つまり、ほぼ3人中2人は、多少なりとも本会に参加することで、自らの生活や生き方に影響を受けていることが分かる（なお、残り3分1の人たちの多くは、会合や寺子屋講座などへの参加率が低い人たちである）。それは具体的にどのような影響をおよぼしているのであろうか。A集団の人たちの自由記述によれば次のとおりである。

「色々な人と知り合え（自分のジャンルと違う）、考え方や物事の捉え方で新しい発見がある。身近な人が改めてすごいと思った。挨拶程度の関係だった人が仲間だと思えるようになった。自分が進化しているような気がする」（正会員）

「ビジネスと地域社会の接点になっている」（正会員）

「（本会と同じく）自分の職業も人をまたは人とのつながりを作る仕事であると思っているので縁の下の力持ち的役割をしていくことが勉強になっています。」

「いろいろな世代、職業の人と交流できること」（正会員）

「（この会の活動を通して）自分が得ることのできる自信などが自分にとっての何よりのプラスであり、私の生き方そのものです」（大学院生）

「新しい活動に参加し、未知の領域に少しずつ入っていけるのが楽しいです。文化について学ぶ機会が増えたことによって、仕事について新しい見方ができ

Hosei University Repository

るようになったと思います」（大学院生）

「学校や仕事（アルバイトなど）とは異なる場で明確な目標をもって活動する、あるいはそういう方々と出会うことで自分の生活や生き方の幅が広がったような気がします。自分の生活の中で、家族としての自分や学生としての自分以外に、どんな自分でありえるのか、どんな自分でありたいのかを考える上でもとても貴重な体験になっていると思います」（大学院生）

「活動することにより、普段の生活の中での視点が変わり、新しい発見や気づきが増えた。自分が居住する以外の地域と関わる事の楽しさを知れた」（大学生）

「子供や年配の方々が楽しそうに（寺子屋）講座に参加しているのを見ると、とても嬉しくなる」（大学生）

「マップづくりを通じで野田の歴史や文化、土地柄を知ることができ、野田の良さを感じるようになった。また目上の人たちと話すことにより、自分の視野の狭さや人生観を学び、皆さんの野田に対する思いを再認識した」（高校生）

以上のように、地域での新しい人間関係が形成される、「まち」の歴史や文化を知り、その良さを発見する喜び、自己発見する機会になる、奉仕する喜び、自分の職業に活用できるなどのように、個人の生き方や生活に影響を及ぼしていることが分かる。

また、B集団の人たちは次の通りである。

「自分の生活がより自覚的に考えられるようになった」

「自分より若い世代の人達が活動している様子を（メーリングリスト上）メールを通して伝わってきます。活動している様子自体が自分にも刺激になる」

「今まで漠然と考えてきた自分の生き方が系統的（？）具体的な姿で、目の前に見えてきたような気がします」

「福祉の活動は自ら求めなければ限られた枠の中で、限られた人たちで終わってしまいがちです。色々な機会を大切に、そして様々な人たちとの出会いを心の栄養にして、自分自身をスキルアップさせて戴いていると感じています」

「野田市に生まれ野田を愛する住民として、野田の文化に関わり、多くの人とその文化を共有できる事は大変嬉しいと思います」

以上のように、個人の内面的な生き方を自覚したり、新しいコミュニケー

Hosei University Repository

ションの回路が出来たことについての喜び、やりがいなどを感じている。

（3）課題

他方では、メンバー間のコミュニケーションが不足していることが浮き彫りになった。

半年以上の経験をもつA集団でも、コミュニケーションがとれているかという設問について、「大いに思う」2人、「少し思う」6人、「不明」6人、「あまり思わない」1人である。コミュニケーションが多少とれていると思う人は半数ほどである。

B集団では、「大いに思う」0人、「少し思う」8人、「不明」5人、「あまり思わない」1人、「全く思わない」1人である。このうち、「あまり思わない」と「全く思わない」の2人は新規に加入した人たちである。やはり、ここでもコミュニケーション不足が目立つ。

以上のことから、メンバーにとって本会活動の質をさらに高めてゆくためには、メンバー間のコミュニケーション不足を解消することが課題となる。アンケート調査をした2005年5月の時点までは、事務局からの情報伝達の円滑化に重点をおいていたため、メンバー間の意思疎通については意図的な方策をとらなかった。情報伝達がスムーズであるかという設問については、A・B両集団34人のうち、「大いに思う」17人、「少し思う」11人、「不明」4人、「あまり思わない」2人となっているように、充実化がはかられている。先述した「やりがい」「楽しさ」「キャリア形成」に半数以上の人たちが意味を見出しているのは、情報伝達をこまめに行って風通しの良さをはかっていることによると思われる。さらにコミュニケーションの促進を図れば、それらの割合がさらに高くなることが予想される。

また、本会への貢献度についても課題が残る。A集団は、実行する人たちであるが、本会の活動に対する貢献度の自覚がやや低い。本会の活動に貢献しているかとの設問について、「大いに思う」0人、「少し思う」9人、「不明」5人、「あまり思わない」1人となっている。しかし、私から見て明らかに貢献度が高い人でも「不明」にしているので、一概にいえないが、ここでは「大いに思う」人が不在であることが課題となる。B集団でも、「大いに思う」0人、

Hosei University Repository

「少し思う」7人、「不明」4人、「あまり思わない」2人、「全く思わない」1人となる。やはり傾向は同じである。貢献度を高めてゆくことが出来れば、「やりがい」「楽しさ」「キャリア形成」をさらにプラスにもってゆくことにつながるかもしれない。メンバー間のコミュニケーションの不足と、会への貢献度の不十分さとは相関があるかもしれない。それらの改善策として、アンケート調査後から次のような事業を実施している。

研修会の実施：2005年10月5日、東京・谷中芸工展の見学会（参加者3人)、11月23日、野田市内の建物見学会（参加者11人)。

観月会の実施：2005年9月18日。本会のメンバーと、それまでの寺子屋講座の参加者や、その知人・友人を誘い懇親の場とする。しかし、A集団である実行委員会のメンバーが準備してもてなすことに重きがおかれ、B集団は来賓的な扱いになり、相互のコミュニケーションを図ることができなかった。

ニュースレターの発行：会員相互の情報の共有化をはかると共に、対外的に本会の広報資料とする。

寺子屋講座への参加：ノルマ制（年2回以上)。これまでにB集団の人たちには、理事会を欠席し、寺子屋講座に一度も来ない人がいる。本会の活動に参加しなければ、当然インセンティブが低下するので、最低2回以上は寺子屋講座に参加していただくことにした。返信はがきに出欠予定を記入してもらい事務局で管理して、その出欠予定状況をメンバー内で公開する。

5．結語

かつて野田では、市民主導の文化による「まちづくり」が活発であった。そこには戦前からの文化的な風土のもとに、池松や深津などのような牽引役となるリーダーがいた。また、野田醤油による経済的な繁栄を背景に、外部から招聘されて文化人たちも集まっていた。彼らは、自由放談の雰囲気を大事にして、文化をキーワードにして、「まち」の再生をはかった。そこに集った市民たちは、多彩な職業の人たちからなり、野田醤油や財団法人興風会は、そうした活動を支援した。

NPO法人野田文化広場の設立は、過去のこうした動きと決して無関係ではない。筆者は、当時の文協の中核的メンバーであった、池松や佐藤らの醫咳に

Hosei University Repository

接したし、メンバーの中にも当時若手として活躍していた中村藤一郎氏などがいる。野田に在住して22年になるが、いつのまにかそういう人たちの影響を受けてきたのだと思う。

NPO法人野田文化広場は、かつての文協のような大規模な「まちづくり」はできそうもない。しかし、まずは現在の組織や運営の中で、中心市街地の活性化のために市民のコミュニケーションの促進を図ることをミッションにして、寺子屋講座、マップづくり、観月会などの事業のように、身近なできるところから「まちづくり」に着手している。

その結果として、本会の活動は、メンバーの生活や生き方に影響を及ぼしていることが判明した。それはミッションの共有を前提にして、「やりがい」「楽しさ」を感じる。さらに個人の内面的な生き方について自覚するようになり、地域での新しい人間関係が形成される喜び、「まち」の歴史や文化を知りその良さを発見する、奉仕する喜び、自分の職業に活用できるなどのような感想に示されている。その人のキャリアや本会での立場やコミットのあり方などによって多様であるが、それは「まちづくり」が個人のキャリア形成に及ぼす影響の特性といえるかもしれない。

今後は、不足しているメンバー間のコミュニケーションの促進や、本会に対する貢献度を高めてゆく対策をとることにより、さらにメンバーのキャリア形成にプラスにもってゆくことが期待できる。

さらに、今回の考察の中から得られた、「まちづくり」に普遍化できると思われることをあげるならば、「まち」の人たちのコミュニケーションの促進をはかるためには、まずメンバー間のコミュニケーションが前提となることを確認することができた。現状のように、拠点場所がない条件下では、メンバー間のコミュニケーションを図ることは容易ではない。寺子屋講座や理事会、各種委員会などの会合だけでは、コミュニケーションを充分とることがむずかしい。文協の場合には興風図書館の佐藤の部屋が日常的なサロンの場になり、メンバーたちが自由に出入りする環境が整っていたことが幸いしていた。しかし、不利な条件でも、知恵を出してこの課題の解決には取り組むことが必要である。

一方では、本会が設立（準備段階から）してから約１年10ヶ月の期間（2006年１月現在）に、実行委員会や理事会のメンバーの中から、それぞれ核になる

Hosei University Repository

人たちが自然に選抜されるようになってきた。アンケート調査以降も、会議や事業への参加率が高く、つまりコミットの度合いの高い人たちである。その人たちを核にして、他のメンバーに影響を与えていき、さらに「まち」の人たちの協力や、共同事業などを継続しながら、少しずつコミュニケーションの範囲を拡大することができるだろう。メンバー全員のキャリア形成の底上げを図る一方で、能動的なメンバーにより「まちづくり」の成果をあげていく。両者のバランス感覚を保ちながら運営することも今後の課題である。

［註］

(1) 田村明1999.5『まちづくりの実践』岩波新書、p32

(2) 昭和25年に周辺の3村（旭村、梅郷村、七福村）と合併する以前。

(3) 田中則雄・中村藤一郎・下津谷達男・小鷲てる・金山喜昭1999「(座談会) 野田の人たちによる文化活動を語る」『野田文化の芽ばえ－明治から昭和中期の社会教育史－』野田市郷土博物館、p 61-77)

(4) 池松武之亮1978「(座談会) 文協30年の歩みと今後の展望」『文協創立30周年記念誌』野田地方文化団体協議会、p13

(5) 小田倉一1953「二六クラブのこと」『野田地方文化団体協議会回顧録』野田地方文化団体協議会、p 5

(6) 野田商工会議所1993.3『商店街等活性化実施計画策定事業報告書』p79

Hosei University Repository

Machizukuri and the Citizen's Careers : The Members of Noda Culture Square

Yoshiaki KANAYAMA

Machizukuri (literally, "town construction") is the building of a city for and by the citizens who would like the town to be better than before. It has often been used to solve the problems of a town. In Noda, a town in Chiba prefecture, people used not to have any living energy, and the streets were lonely and poor. Improving them was necessary for people to communicate with each other.

My colleagues and I established Noda Culture Square in January 2005 to solve this problem; in May 2005, it became a Non-Profit Organization of the prefecture with 30 regular members and 11 student members, it has lectures called *Terakoya* (an old term meaning a school run by a temple); workers talk about their careers and skills, persons, who learn to compose accomplishments, talk about theirs, hands-on learning is provided for children and their parents. And we made a map which shows buildings in the old town. A party held on the day of the harvest moon gathered about 90 people.

The members have felt something come alive from these activities, having a mission in common. This was shown by a questionnaire survey. On the other hand I found that we had not been communicating with each other as well as we would have liked. And a lot of members felt as if they weren't contributing to the activities of Noda Culture Square.

I think it is necessary for them to communicate with other members and contribute to the activities in some way: arranging parties among members, urging people to join *Terakoya*, etc. Perhaps they would be better off. But if

Hosei University Repository

they don't like to join in, I could not force them to do so.

In *Machizukuri*, I have found that communicating with members is based on how we realize the mission at the first stage. And it is important for them to improve their life through *Machizukuri*.